

# コミュ伝

中条省平

Chujo Shohei

コロナ禍が世界を襲った二〇二〇年春以来、アルベール・カミュは時の人になりました。カミュが七〇年以上も前に発表した小説『ペスト』が、あまりに正確にパンデミック（感染症の爆発的蔓延）<sup>まんえん</sup> という天災の到来を予言しているように見えたからです。

カミュの『ペスト』は、病の不条理な出現に始まって、人々の根拠なき楽観と、権力者および官僚組織の無責任なことなかれ主義を根本的に批判し、伝染病が社会構造と人間心に及ぼす大きな影響をじつに細やかに分析しています。まさに現在コロナ禍によって起こっている世界の変質と同じ現象を、感嘆すべき鮮やかさで描きだしているのです。

その結果、『ペスト』は世界中でベストセラーになり（もちろん日本でも）、コロナ禍への対処法を考えるための力づよい拠りどころとなりました。

私はコロナ禍前の二〇一八年にNHKの「100分de名著」という番組でカミュの『ペスト』を解説していたので、コロナ禍になってから、「『ペスト』とコロナ」というテーマで多くの原稿や講演を依頼されました。その執筆や談話をおこなうなかで、たしかに

『ペスト』はまるで今回のコロナ禍を予言しているかのように思えましたし、この災厄に対応するための無数のヒントをあたえてくれるすぐれた小説だと確信しました。しかし、それにとどまらず、読みなおせば読みなおすほど、人間と世界の本質に関する深い思考を刺激してくれる、世界文学史にも稀まれな古典なのだ、という思いを強くしました。

そこからさらに進んで、いまから一一〇年ほど前にアフリカに生まれたフランス人であるアルベール・カミュという人間が、なぜ感染症の蔓延と闘う人間群像の物語を書かねばならなかったのか、そして、その小説『ペスト』にこめられた人間の思考の限界ともいえるような側面は彼の人生のどこから生まれてきたのか、いや、そもそもカミュの人生とはどのようなものだったのか、という問いへと導かれていったのです。

カミュは、当時フランスの植民地だったアルジェリアに生まれ、生後まもなく第一次世界大戦で父を失い、厳しい貧窮のなかで幼少年期を送りました。カミュの思想の核心にあるのは「不条理」という概念ですが、彼は子供のころから、この貧窮によって世界が不条理であるという事実を、観念としてではなく、まぎれもない現実として体に叩きこまれていました。カミュの思想は、本や学校で学ぶ知識から出発したのではなく、彼の生きる身体的現実として形づくられていったのです。

しかし、一方では、地中海の太陽と海が、カミュの人生に限りない富を注いでくれました。その無償のエネルギーの贈与もまた、世界の不条理の例外的な表れというべきものかもしれません。カミュにとって、地中海という場所は、終生、彼の思想を育む母胎となり、彼の魂の故郷でありつづけました。

とはいえ、基本的に世界の不条理は人間にたいして否定的に作用します。カミュの場合でいえば、青年期には肺結核に罹患して、その後ずっと、つねに自分の死を意識することになります。また、社会に出て新聞記者となつてからも、植民地支配の残酷さを告発したため、新聞記者の職を解かれ、祖国アルジェリアから追放されることになります。さらに、アルジェリアからフランスに移つたのち、わずか数カ月でフランスはナチス・ドイツに蹂躪され、カミュはファシズムへの抵抗運動に入ることを余儀なくされます。貧窮、死の病、祖国からの追放、ファシズムの脅威。カミュの前半生は、不条理との闘いの連続だったのです。

本書は、そのようなカミュの人生をたどりながら、そこから生みだされた文学の、深く、多様な側面を探っていく試みです。読者のみなさんには、カミュの人生の波瀾万丈に目を眩りながら、その文学の途方もない豊かさ面白さを発見していただければ幸いです。

## 目次

まえがき

3

## 第一章 アルジェの青春——太陽と死の誘惑

10

「黒い足」をもつフランス人／沈黙の象徴——母カトリーヌ／沈黙がもつ絶対的な力への確信と希求／困窮のなかの歓喜／死の病・結核の影／シモーヌ・イエとの結婚／共産党への入党／シモーヌとの別れ

## 第二章 闘う新聞記者——現実へのコミットメント

32

愛猫カリとギュラの魂／演劇と恋愛／世界の無意味さ——不条理の発見／共産党からの除名／ジャーナリスト・カミュ／言論統制との闘い／パリへの旅立ち

### 第三章 衝撃の作家デビュー——『異邦人』の世界

パリの孤独と『異邦人』の執筆／パリ陥落、結婚、そして失業／〈不条理三部作〉の完成／『異邦人』への賞讃／「ママン」、そして時制がもつ意味／三島由紀夫が評するムルソー／「不条理」の発見／美しさゆえの不条理

52

### 第四章 結核による追放——シーシュポスとは誰か

「青春が僕から逃げていく」／「シーシュポスの神話」刊行／人生という不条理との対決／肝心なことは、もっとも多く生きること／『ペスト』の構想に着手／マリア・カザレス、サルトルとの出会い／ボーヴォワールが語るカミュ

72

### 第五章 戦争への参加——レジスタンスの日々

「ドイツ人の友への手紙」における倫理観／地下新聞の編集長「ボシャルル」／戯曲『誤解』に表れる重要なモチーフ／不条理を前にしても「神にすがってはいけない」／マリア・カザレスとの再会／不条理な運命を突破するレジスタンス／解放、そして新たな難問

92

## 第六章

### 演劇人としての成功——『カリギュラ』の二重性

妻フランシーヌとの再会／カミュ、原爆使用を批判する／戯曲『カリギュラ』との葛藤／「生涯をかけた作品」／人間の条件をこえようとするカリギュラ／『ペスト』への予感／初のアメリカ訪問、そして新たな恋／共産主義との対峙

112

## 第七章

### 小説家の賭け——『ペスト』の意味するもの

「成功の悲しさ」／不条理は何も教えない／デイスカッション小説としての『ペスト』／ペストは天罰か？／子供が苦しむ世界は愛せない／タルーの告白／ペストを忘れないために書く／母と息子——沈黙の愛の姿

132

## 第八章

### 二度の舞台の陰で——『戒厳令』と『正義の人びと』

ペストを題材にした演劇作品／『デスノート』の先駆的作品／「死刑を容認することこそがペストなのだ」／マリア・カザレス、ふたたび／正義のための暴力は許されるのか？／肺結核の再々発／運命の女性に捧げられた戯曲

154

第九章

ふたつの苦い戦い——『反抗的人間』論争とアルジェリア戦争

175

『反抗的人間』ついに完成／カミュの過ち／「アルベール・カミュへの返答」／孤独と演劇への没頭／救いをもたらす太陽と海／「カミュを銃殺しろ！」

第一〇章

早すぎた晩年——孤独と栄光の果てに

196

新作『転落』にこめたみずからの苦悩／生前最後の小説集『追放と王国』／はじめて女性を主人公にした「不貞の女」／ジャーヌの不貞の意味／歓喜なきノーベル賞受賞／「青年の不幸は私のものである」／孤独との闘い、そして突然の死

あとがき

218

※本文中におけるフランス語と英語の文献から引用した部分の翻訳で記載がないものは、すべて著者によるものです。



## 第一章 アルジェの青春

—— 太陽と死の誘惑

「黒い足」をもつフランス人

アルベール・カミュは、一九一三年一月七日、アルジェリアのモンドヴィ（現ドレア）に生まれました。

モンドヴィは、中心都市アルジェから四〇〇キロ以上離れたアルジェリア東端の、チュニジアとの国境近くに位置する地中海沿岸の町です。この町のそばには大きなブドウ畑とワインの醸造工場があり、アルベールの父親リュシアンは、そこでワインの樽詰め職人として働いていました。

当時、アルジェリアはフランスの支配する植民地であり、アルジェリアに住むフランス人は「ピエ・ノワール（黒い足）」と呼ばれて、本国に暮らすフランス人よりも一段地位



幼少期のカミュ(4歳)。フランス領アルジェリア、アルジェにて。

の低い国民と見なされていました。

アルベールが生まれて約九カ月後に、第一次世界大戦が勃発します。父親のリュシアンはただちにアルジェリア歩兵部隊に徴用され、軍事輸送船で運ばれてヨーロッパの前線に動員されます。そして、第一次世界大戦でも激戦として知られる北フランスでのマルヌの戦いに参加して、頭部を負傷し、なぜかはるか遠いブルターニュ地方のサン＝ブリューの病院まで送られ、一〇月一日そこで死亡しました。もちろん、父リュシアン<sup>が</sup>の遺体が故郷のアルジェリアに帰ることはなく、未亡人となった妻カトリーヌのもとには、夫の頭蓋<sup>ずがい</sup>から取りだされた砲弾の破片が送られてきました。こうして、アルベール・カミュは生後

一一カ月にして、父親を失ったのです。

夫を亡くしたカトリーヌは、赤ん坊のアルベールと、アルベールより四歳年上の長男リュシアン(父親と同名)を連れて、アルジェの実家に帰りました。この家は、アルジェの下町、主に労働者階級の住むベルクール地区のリヨン通り<sup>に</sup>あり、アラブ人街とも接していました。実

家にはカトリーヌのふたりの弟、エティエンヌとジョゼフも同居しており、エティエンヌは甥おいのアルベールを可愛がりました。エティエンヌ叔父はカミュの小説に姿を変えて何度か現れますが、とくに未完の遺作『最初の人間』（一九九四年初刊）では、アルベール少年にとって父親代わりになった人物として活写されています。

しかし、この一家を支配したのは、カトリーヌの実の母親、つまりアルベールの祖母でした。祖母は気性の激しい女で、幼い孫のアルベールたちにしばし革むちの鞭むちをふるいました。

### 沈黙の象徴——母カトリーヌ

アルベールの母親カトリーヌは家政婦の仕事をして生計を支えましたが、祖母に頭がが上がらず、祖母があまりにひどく孫たちを打うち擲ちやくすると、「頭がだけはぶたないで」と力なく抗議したといえます。カトリーヌは生まれつき難聴で、唇の動きを読むことはできませんでしたが、読み書きもできず、極端に受動的な性格でした。しかし、この母親の姿は、幼いカミュの記憶のなかに深く刻みこまれ、生涯、人生の苦しみを沈黙のなかで耐えしのぶ人間像の原型として、彼のなかでひそかに生きつづけます。

カミュが世界中に名を轟かせた傑作小説『異邦人』（一九四二年）は、「きょう、ママンが死んだ」（窪田啓作訳）という有名な一句で始まりますが、そうカミュが書いたとき、もちろんカミュの母親は生きていましたし、結局、彼女は息子よりもすこしだけ長生きして、息子と同じ一九六〇年にアルジェで亡くなることとなります（享年七七）。カミュが『異邦人』の冒頭で主人公ムルソーの母親を死なせたことには、子供のころ母親に何もしてやれなかったというカミュの痛恨と罪悪感がひそんでいるように思われます。

しかもカミュは、母親の受苦と沈黙についてエッセーなどで何度も言及しながら、ついに一度も自分の小説のなかでは、正面から母親の姿を描きだすことがありませんでした。青年期に書いた自伝的短編「肯定と否定のあいだ」（短編集『裏と表』一九三七年所収）の次の文章が、そのほとんど唯一例外的なものなのです。この短編の語り手「僕」は、幼年時代の自分を「彼」として回想します。

「母のまわりで、夜が濃くなった。その闇のなかで、母の無言は癒やしがたい悲嘆の色を帯びている。「…」だが彼は、この「母の」動物のような沈黙を前にして泣くことができな。彼は母に憐れみを感じているが、それは彼女を愛していることになるのだろうか？ 母はこれまで一度も彼をやさしく愛撫したことがなかった。というのも、母はそうするこ

とを知らないからだろう。だから彼はそこに長いこと立ちつくし、母を見つめているほかない。彼は自分をまるで他人のように感じ、その苦しみを意識する。だが、母に彼の立てる音は聞こえない。彼女は聾ろうなのだ。「…」たしかに、彼は母に一度も声をかけたことがなかった。だが、実際どうしてそうする必要があるだろう？ 黙っていても、ことは明らかになるからだ。彼は彼女の息子で、彼女は彼の母なのだ。母は息子にこういえない。「分かつてるわね」

### 沈黙がもつ絶対的な力への確信と希求

はるかのおち、一九六〇年にカミュが交通事故で急死したとき、車の残骸に交じって、近くの畑の土のなかから、牛革の靴かばんが見つかりました。その靴には、カミュの最後の長編小説『最初の人間』の書きかけの原稿が入っていたのです。そこには、こんな一節が残されていました。

「理想としては、この本が初めから終わりまで母に宛てて書かれたならば——そして、最後になってようやく、読者がこの母は字が読めないことを知るならば——そうだ、それを理想的だろう。「…」また、彼がこの世でいちばん切望していたのは、彼の人生と肉体

がどんなものだったか、それを母が完全に読みとることだった。だが、そんなことは不可能だ。彼の愛、彼が唯一愛したものは、永久に無言のままをとおすだろう」

カミュは人生の始まりにおいて、母親との交わりをとおして、こうした言葉の無力、交流の不可能性を痛感し、しかし、それにもかかわらず、沈黙がもつ絶対的な力への確信と希求を養いました。そして、その相反するふたつの思いは、生涯を通じて、彼の文学の通奏低音をなしていました。このことをまずは強調しておきたいと思います。故郷アルジェを出たあとも、カミュはおりに触れ、母と会うためにアルジェに戻りました。それなのに、最初の短編集『裏と表』のあと、母の姿はカミュの小説からほとんど消えてしまいます。しかし、カミュが自分の小説のなかに母の姿を書きこみたかたという思いは、おそらく最後まで消えませんでした。『裏と表』が再版（一九五八年）されたとき、カミュはそれに序文を寄せてこんなふうに記しているからです。

「この再版のため、長い年月のうちに『裏と表』を読みなおしてみると、その何ページかを前にして、その稚拙さにもかかわらず、私は本能的に、これこそ本当なのだと分かる。本当というのは、この本に出てくる老女であり、沈黙するひとりの母であり、貧困であり、イタリア原産のオリヴの木々に差す光であり、孤独だが人々にむかう愛だ。これらはす

べて、私のこの目に眞実を証すものだ。「…」もし私が、多大な努力を注いで、ひとつの言葉を作りあげ、いくつかの神話を再生させ、いつの日か『裏と表』をふたたび書きなおすことができなければ、私は結局何ものにも到達しないことになる。それが私の漠然とした確信だ。何があるうとも、私はその試みに成功することを夢想し、さらにこの作品の中心にひとりの母の讚嘆すべき沈黙を置いて、この沈黙に釣りあう正義や愛を見つけるためのひとりの男の努力を描こうと思いつづけるのだ」

カミュは未完の遺作『最初の人間』で、自分の幼年期を詳細に描きだそうとしましたが、もしかしたらこの書物が、『裏と表』再版の序文でカミュが想像している幼年期の経験の書きなおしになる予定だったのかもしれない。とはいえ、『最初の人間』の残された草稿を見るかぎり、主人公の母は、カミュの實在の叔父と同じ名前をつけられた主人公の叔父と比べても、曖昧な、影の薄い人間としてしか描かれていません。文学とは沈黙を破ることです。それゆえ、カミュにとって沈黙を守る母とは、文学の根源的な条件に懐疑を突きつけ、世界と人間の不可解さへの純粹な畏怖を凝縮するような存在になっていたのではありません。

## 困窮のなかの歓喜

それはともかく、カミュの幼年期が貧困だったことは否定できません。しかし、カミュはその経験から怨恨えんこんをひき出すことはありませんでした。そこには、カミュにとって幼年期のもっとも重要な生の源泉である自然の力、とくに「太陽」があつたからです。同じ『裏と表』再版への序文でカミュはこう書いています。

「貧しさは、最初、私にとって決して不幸ではなかった。そこに光が豊かな富を降りそそいでいたからだ。私の反抗でさえも、この光に照らされていた。『…』太陽は私に、歴史がすべてではないと教えてくれた。人生を変えること、そうだ。しかし、それは、私が崇拜している世界を変えることではない。『…』いずれにしても、私の幼年期を支配していたあの美しい熱が、私からあらゆる怨恨を奪いさつた。私は困窮のなかで生きていたが、同じく一種の歓喜のなかでも生きていた。私は、自分に無限の力を感じていた。『…』アフリカでは、海と太陽に金はいらぬ」

ここで「歴史」の一語が唐突に出てくるのは、カミュが、歴史とともに人間は進歩するという考えかたを嫌っているからです。原初の太陽の光に照らされて、無条件で生の喜び、生の力を感じるとき、未開人にも文明人にもけつして優劣は存在しないのです。「私が崇



拝している世界」というのは、キリスト教的な一神教の秩序に支配される前の、ギリシア・ローマ的、あるいは、カミュの言葉を借りるなら、「地中海」的な汎神論の世界を意味しているのでしょうか。

小学生のカミュはゴールキーパーを得意とするサッカー好きの少年で、学業もきわめて優秀でした。ところが、家庭の貧窮ゆえ、リセ（中学・高校）に進むことは不可能でした。しかし、カミュは師に恵まれていました。小学校の教師だったルイ・ジェルマンが、カミュの家を訪れ、アルベールは奨学金をもらってリセに進学すべきだと家族を説得しようとしたのです。しかし、一家に強権をふるう祖母は、当然この家ではみんなが働かなければならない、と孫の進学に反対しました。ところが、普段は祖母のいいなりになる母のカトリーヌが、長男リュシアンが働いて家計を助けるのだから、弟のアルベールのほうは勉強を続けさせたいと主張したのです。いつもは何もいわないカトリーヌの珍しく反抗的な態度を見て、ついに祖母も譲歩したのでした。

カミュはこのジェルマン先生への恩義を一生忘れず、のちにノーベル文学賞を取って、スウェーデンでの受賞演説をまとめて出版したとき（一九五八年）、その小冊子を「ルイ・ジェルマンに」捧げています。



バカロレア準備クラスの教師、仲間たちと。後列右からふたりめがカミュ。

カミュはジェルマン先生の期待に應えて、勉学に精を出して首席の成績を確保し、ジェルマン先生のほうも毎日、長時間の補習をおこないました。その結果、カミュはリセ進学のための奨学生試験に合格し、アルジェ市内の遠方にあるリセに路面電車を使って通学することになります。

このリセでの大きな出来事は、バカロレア（大学入学資格試験）の準備クラスで、哲学教師のジャン・グルニエと出会ったことです。グルニエは当時三二歳でしたが、フランスの名門出版社であるガリマール社ともつながりをもち、のちには独自のポエジーに満ちた哲学エッセーの著者として知られることになります。グルニエはまもなくカミュの才能を見抜き、ここから、

カミュの生涯にわたる深い精神的な師弟関係が始まることとなります。じつさい、カミュの最初の短編集『裏と表』は「ジャン・グルニエに」捧げられています。

## 死の病・結核の影

しかし、グルニエと出会ってまもない一九三〇年の末、一七歳になったばかりの青春のさかりに、カミュは深刻な肉体的危機に見舞われます。突然、咯血かっけつしたのです。それまで咳きこんだり、気を失ったりという徴候もあつたのですが、周囲の人々はそれをせいぜい大好きなサッカーのやりすぎくらいに考えていました。しかし、咯血の原因は、結核でした。この恐ろしい病は、カミュにとって一生続く宿痼しゆくゑとなります。この病歴のせいで、結局、大学やりせでの教員資格を取ることができませんでしたし、いっぽう、第二次世界大戦に際しては兵役を免除されることにもなりません。このころ、結核の特効薬ストレプトマイシンはまだ開発されていなかったもので、結核は死に至る病と見なされてきました。カミュはほとんど人生の出発点である思春期から、自分の死を意識するようになったのです。カミュの最初の本である『裏と表』が周囲にいる人間たちに焦点を当てた短編集であるのにたいして、続いて発表された第二短編集『結婚』（一九三九年）は、アルジェリアの強

烈な風土に触発された抒情的な作品を収めています。そのなかで「ジェミラの風」というエッセーふうの作品には、次のような一節が見出せます。ジェミラとは、アルジェの東方三〇〇キロの高地にある荒涼たる古代ローマの廢墟の町です。

「ひとりの若い男が世界を正面から見すえている。彼には死と虚無の觀念を磨く時間がかつた。にもかかわらず、その恐怖を噛みしめたのだ。これが青春というものなのだろう。死とのこの厳しい対面、太陽を愛する動物のこの肉体的な恐怖」

太陽が生が無条件の肯定を表すシンボルだとしても、太陽のもとでは、逆に、その太陽の否定である死と虚無の觀念が、つねに暗い姿を現すのです。これが、カミュの思春期から培われた世界の根源的なイメージといえるでしょう。

しかし、結核の発病はただちに死の危険に結びつくものではありませんでした。ここでもカミュは幸運だったといわなければなりません。結核の療養生活を送るにあたって、貧しい実家を出て、アルジェ市内で一番といわれる精肉店を営むギユスターヴ・アコー叔父の家で生活することができたからです。アコー叔父は、カミュの母の妹であるアントワネットと結婚していたのです。子供のいない叔父夫婦は、頭のない甥のカミュをひどく大事にし、将来は高校の教師にしてやるか、もしくは、自分たちの精肉店の跡継ぎにすること

まで考えます。

アコー叔父はアルジェの中心街で精肉店を営むかたわら、アナーキストを自称し、フリーメーソンの集会に通い、シャルル・フリーエやヴィクトル・ユゴーやエミール・ゾラなど社会主義的な作家の書物を愛読するなど、保守的伝統に逆らう知的な人物でもありました。カミュはこの叔父の豊かな書棚でさまざまな思想家や作家に親しみ、叔父といろいろなテーマについて議論をおこないました。しかも、ここは大きな精肉店ですから、当時、結核に対抗する最善の方策と考えられていた食餌療法（しよくじ）をおこなうことができました。血の滴（した）のような生肉やステーキを毎日のように食べられたのです。

そのかいあつてか、カミュは一年ほどでリセに復帰し、グルニエ先生と再会します。そして、本国フランスのパリにある文科系最高の名門、エコール・ノルマル・シュペリユーール（高等師範学校）を受験する準備クラスで勉強をするようになります。

しかし、同時にカミュは文学と哲学にも大いなる興味を注ぎ、とくにアンドレ・ジツドの作品を愛読します。

ジツドがフランスでの厳しいキリスト教道徳による抑圧に苦しめられ、アルジェリアはじめ北アフリカに赴くことで精神と肉体を解放し再生させたことは、彼の小説『地の糧』

(一九五二年)にくわしく書かれています。『地の糧』の読書をかミュに勧めたのは、宗教的権威を嫌うアコー叔父でした。しかし、北アフリカに育ったかミュは、なまじその土地をよく知るだけに、最初は『地の糧』に抵抗を示しました。しかし、結核のせいで読書に耽<sup>ふけ</sup>るようになって以来、『地の糧』をじっくりと再読し、今度は大きな感銘を受けて、それ以降は、ジッドが自分の青春を支配したとまで断言しています。ジッドの『地の糧』には、新たな人生の再出発を決定づける輝かしい光が満ちているからでしょう。

はるかこの話になりますが、かミュとジッドはひとつ屋根の下で暮らすことになりました。第二次世界大戦の最中、ジッドは戦火を避けて南仏や北アフリカを点々としていたのですが、かミュは、ガリマール社の仲介で、ジッドが不在のパリの住居に隣接する一室に住んだのです。ジッドが北アフリカからフランスに帰ってきたのちは、隣人としての付き合いを続け、第二次世界大戦の終結を告げるニュースを、かミュとジッドはいっしょにラジオの前で聞いたのでした。

### シモーヌ・イエとの結婚

さて、アルジェリア時代のかミュに戻りましょう。一九三三年の秋、一九歳のかミュは、

結核による健康の不安からパリのエコール・ノルマル・シュペリユールへの進学を断念し、アルジェ大学の文学部に進み、大学でも講義をもっていたジャン・グルニエの授業などに出席します。

大学に入学する前から、カミュはシモーヌ・イエという女性と付きあっていました。シモーヌは赤みがかったブロンドで、ほっそりとひき締まった肢体に、最新ファッションの衣服を纏った美女で、まわりの青年たちからは大いにもてはやされていました。しかし、保守的な大人たちから娼婦まがいの女という中傷も受けるような派手な女性でした。シモーヌははじめカミュの友人マックス・ポール・フーシエの恋人だったのですが、シモーヌと出会って夢中になったカミュが、彼女をフーシエから奪って自分の恋人にしてしまったのです。

シモーヌはすでに父を亡くしていましたが、母のマルトはアルジェで眼科医として確かな評判を得て、別の男性と再婚して、裕福な暮らしをしていました。しかし、シモーヌには重大な欠点がありました。激しい生理痛を和らげるため、医者である母マルトがシモーヌにモルヒネの注射をしたせいで、モルヒネ中毒になってしまったのです。シモーヌは母の薬のストックを漁り、それがなくなると処方箋を偽造したばかりか、モルヒネを手に入

れるために町の若い医者たちを誘惑するという噂<sup>うわさ</sup>さえ立つようになっていました。

しかし、この欠点はむしろ若いカミュをシモーヌに引きつける要因にもなりました。カミュは、精神的な弱みを抱えて苦悩する若い女性を庇護するという、恋人をこえる人間的な役割を自分に見出したのかもしれませんが。

これまでカミュを可愛がってきたアコー叔父は、この危険な女の出現に怒りを隠さず、カミュと口論になりました。その結果、カミュはアコー叔父の家を出て、兄のリュシアンの家に転がりこみます。カミュはいつとき学業の継続すら危ぶまれる状態に陥りながら、ついに重大な決断を下します。一九三四年六月、アルベール・カミュとシモーヌ・イエは正式に結婚したのです。シモーヌはまさにジューン・ブライドになったわけです。新郎は二〇歳、新婦はまだ一九歳でした。当時の法律では二一歳が成人年齢だったので、婚姻届にはアルベールの母であるカトリヌ・カミュの同意が記載されています。

この結婚にもっとも好意的だったのは、シモーヌの母マルトでした。新婚夫婦の経済的援助をひき受け、アルジェの高台にある別荘ふうの家をふたりのために用意してやりました。いっぽう、シモーヌを嫌っていたアコー叔父も正式に結婚したことで彼女を甥の妻として認め、購入してあった一四馬力のシトロエンをカミュ夫婦に贈ったのです（ただし、



週のうち一日は、カミュの叔母であるアントワネット・アコーがこの車を使うという条件つきでした。

また、カミュは母に、結婚祝いのプレゼントは何がいいかと聞かれて、白い靴下がダース欲しい、と答えました。人前でお洒落をとおしたカミュは、白い靴下しかはかなかつたのです。カミュのダンディとしての一面を物語るエピソードです。

## 共産党への入党

結婚後、カミュの身边はにわか慌ただしくなります。彼の活動はふたつの社会的領域に広がりを見せました。政治と演劇です。

政治的意識の発露として、カミュは共産党に入党しました。この決意にいちばん大きな影響力をあたえたのはリセ以来の友人で、パリの大学に進学したフレマンヴィルでした。彼はひと足先に共産党に入り、パリの共産党本部の直接の意向に基づいて、カミュにアルジェでのイスラム教徒へむけた共産主義の宣伝活動を担わせようとなりました。また、哲学教師のジャン・グルニエもカミュが共産党に入ることに賛意を示しました。

しかし、カミュは共産党入党後も、直接的な政治活動にはあまり熱心にならず、むしろ、その周辺での演劇や文化的な活動に力を注ぎました。そして、イヴ・ブルジョワなど演劇

仲間といっしょに「労働座」というアマチュア劇団を結成し、こけら落としとして、敬愛するアンドレ・マルローの小説『侮蔑の時代』（一九三五年）をみずからの手で脚色し、舞台にかけます。

また、同志たちとの集団制作の戯曲として、一九三四年にスペインで起こった鉦員たちの反乱の戦い、そして政府軍による鎮圧を描く『アストウリアスの反乱』を創作し、上演を企画します。この戯曲は仲間三人との共同執筆ではありませんが、全体の仕上げはカミュがおこないました。しかし、上演にたいして極右派のアルジェ市長がホルルの貸しだしを拒否し、事実上の上演禁止にしてしまいます。カミュたちに残された手段は、この戯曲を印刷し、本として売りだすことでした。その本の序文には次のような一節が見られます。

「この戯曲が描きだすように、行動は死に至ることによって、人間に特有の偉大さのある種のかたち、すなわち、不条理性に触れることになるのだ」

ここには、のちにカミュが小説『異邦人』と哲学エッセー『シーシュポスの神話』（一九四二年）で縦横に展開する「不条理」の主題が最初の萌芽を見せています。闘いと死と不条理。この戯曲にはカミュの文学の根本的なテーマが浮かびあがっているわけです。

この『アストウリアスの反乱』の三人の共作者のなかにジャンヌ・シカールという女性

がいます。カミュが共産党に入党させた娘で、本心から気を許せる女性の友人でした。また、カミュの誘いに従ってジャンヌといっしょに共産党に入ったマルグリット・ドブレヌという女性もカミュの親友となりました。このふたりとカミュの三人組はあるとき、アルジェの高台に貸家の貼り紙を見つけてその家を気に入り、ジャンヌとマルグリットはその二階を借りて住むことにしました。すでに結婚していたカミュもこの家を友人たちの集いの場とすることに賛成しました。

この家は家主の名前を借りて「フィッシュ屋敷」と呼ばれましたが、カミュの未完の長編第一作で死後出版された『幸福な死』（一九七二年）のなかでは、「世界をのぞむ家」という名前でモデルにされています。フィッシュ屋敷には、のちにクリステイアーヌ・ガランドというタイプ打ちを得意とする女性加わり、彼女はカミュの書いたものをタイプで清書原稿に仕上げていきました。『幸福な死』のなかにクリステイアーヌはカトリックという名で登場し、太陽の光に全裸の体をさらす、無垢で無頓着な、原初の楽園のイヴのような女性として描かれています。『幸福な死』の「世界をのぞむ家」に描かれた三人の女性と主人公メルソーとの共生のさまは、カミュが書いた全作品のなかでもとくに際だった、人間が男女の区別なく自然と調和する、いささか美化されすぎた、しかし、読む者を感動

させずにはおかない青春のユートピアの様相を呈しています。

しかし、「世界をのぞむ家」を離れたカミュの生活には、それとまったく対照的な陰鬱さが影を落としていました。妻のシモーヌとの関係です。シモーヌのモルヒネ中毒は治療するさざしが見えず、カミュとの仲もしつくりといかなくなっていたのです。

## シモーヌとの別れ

一九三六年、二二歳のカミュはついにアルジェ大学に哲学の高等教育修了論文を提出し、修了証授与に値すると認定されます。審査した教授には、恩師で作家のジャン・グルニエも含まれていました。論文の表題は「キリスト教形而上学とネオプラトニズム」。古代ギリシア哲学とキリスト教神学の対立と融合をテーマにした長編です。ここで主に扱われるのは、新プラトン主義の創始者プロティノスと、キリスト教神学の基礎を築いたアウグスティヌスですが、このふたりは、ともにカミュと同じ地中海沿岸のアフリカ生まれなのです。その点から、カミュの関心は厳密な哲学・神学的議論ではなく、キリスト教支配下のヨーロッパ世界における「地中海」的精神の可能性を考えることにあった、と推察することもできるでしょう。

おりもおり、友人で演劇仲間のイヴ・ブルジョワが、カミュとシモーヌの夫妻に、カヌーで川を下りながら中央ヨーロッパをめぐる旅に出ることを提案してきます。これはカミュにとつて人生最後の夏休みになるでしょうし、シモーヌのモルヒネ中毒で暗雲のたちこめていた結婚生活をふたたび明るい方向にむける絶好の機会になるとも思われました。

同年七月、三人はアルジェを發つて、船旅でフランスのマルセイユにむかいました。鉄道でマルセイユからリヨンに行き、さらにスイスを経由してオーストリアに入ります。そして、チロル地方の中心都市であるインスブルックからカヌーによる川下りが始まりました。ついで、モーツアルトの生まれ故郷として音楽祭で有名なザルツブルクに赴きましたが、ここで重大な事件に見舞われます。

旅の最中、カミュは友人たちとの連絡を絶やさぬために、各地の局留めで彼らから手紙を受けとれるようにしていたのですが、ザルツブルクの郵便局で受けとった手紙のなかに妻のシモーヌ宛ての一通が交じっていたのです。アルジェに住むある医師からの手紙で、怪しいと直感したカミュはその手紙を開封しました。するとそこには、医師がシモーヌにモルヒネを供給していた事実と、その医師と妻が愛人関係にあることが明かされています。シモーヌが体を提供することで医師たちからモルヒネをもらっていたという噂は本当

だったのです。

カミュは大きな衝撃を受け、シモーヌと別れることを決意します。しかし、三人での旅は続行することにし、イヴとシモーヌがカヌーで川下りをするあいだ、自分は鉄道で同じ旅程をたどりました。こうして、三人はオーストリアからチェコスロヴァキアに入りましたが、カミュはイヴと妻よりも先にプラハに到着してしまい、ここで孤独な四日間を過ごすこととなります。この陰鬱いんうつきわまるプラハの心象の記録は、『裏と表』の「魂のなかの死」という短編に残されていますが、妻の裏切りと自分の苦悩については、ほんのわずかな示唆さえも見られません。言葉にすることがあまりにもつらかったからでしょう。

さらに三人は、ドイツのドレスデン、オーストリアのウィーン、イタリアのヴェネツィアなどを経て、フランスのマルセイユに行き、そこから船旅でアルジェに戻りました。

シモーヌは母マルトのいる実家に戻り、モルヒネ中毒の療養生活に入ります。そして以後、カミュとシモーヌがいっしょに暮らすことは二度とありませんでした。

それでも、カミュはおりに触れてシモーヌに援助の手を差し伸べ、彼らが正式に離婚するのは四年後のこととなります。カミュがフランシーヌ・フォールと再婚することになり、シモーヌとの離婚がどうしても必要な手続きになったからです。

カミュ伝  
中条省平・著

発行：集英社インターナショナル（発売：集英社）  
定価：924円（10%税込）  
発売日：2021年8月6日  
ISBN：978-4-7976-8078-2

ネット書店でのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)